Osaka University Knowledge Archive

Title	障害児教育体制に関する社会学的探求 : 盲学校教育をめぐる歴史過程と実践の論理
Author(s)	佐藤, 貴宣
Citation	大阪大学, 2014, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/33990
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

〔　題　　名　〕
障害児教育体制に関する社会学的探究―盲学校教育をめぐる歴史過程と実践の論理

学位申請者　　佐藤貴宣

■要旨

本研究の目的は、盲学校における教師たちの実践の意味を捉えることにある。

本研究の構成は以下のようになる。まず、第1章では本研究の立場について述べる。いわゆる障害児の教育の場をめぐる分離・統合論争をレビューし、本研究の立ち位置を明らかにする。この作業は障害児教育という論争的な領域をあつかうに当たって不可欠な作業であると考える。

第2章では本研究の先行研究について全体的なレビューを行う。具体的には日本における教育者か医学的な障害研究をレビューした後に障害学、とりわけイギリス障害学の界隈で蓄積されてきた障害児に関わる教育現象についての研究をレビューする。日本での社会学的な障害児教育研究はまだまだ手薄であるが、イギリスの障害学や教育社会学では障害児教育に関わる業績が1980年代から蓄積されてきており、充実している。それらをレビューし、本研究の方向性を見定める。

第3章と第4章では盲学校の起源をたどり、戦後の盲学校の歩みを跡づける作業を行う。そこで明らかにされるのは盲学校という制度がさまざまな状況のなかでどのように一つの制度として生き残ってきたのかと言うことである。教育制度としてではなく福祉的な制度として展開してきた戦前の状況を辿り、戦後に生じる二つの危機についてその概要を述べる。

第5章、6章、7章は、東北地方に所在する一つの盲学校（これをＶ盲学校と称する）でのフィールドワークからの報告である。そこでは主に生徒の進路に関わるさまざまな事柄にフォーカスを当てた。第5章ではＶ盲学校に90年代に勤務していた2人の教師のライフヒストリーを報告する。この教師たちが担任する生徒たちはそのほとんどが盲学校内部の職業教育課程に出はなく外部の進路を希望していた。そうした状況がこの教師たちにとってどのような経験であったのか、このことを明らかにする。

続く第6章では2005年時点のＶ盲学校に焦点をあてる。主に4人の教師たちへのインタビューデータを用いながら、教師たちが盲学校生徒をどのようにカテゴリー化し、盲学校をどのような場所として定義しているのかを考察する。それにより、盲学校に対する状況定義や生徒のカテゴリー化が生徒の進路形成にどのような影響を与えているのかを分析する。

第7章では盲学校でのキャリア教育の実践に注目する。キャリア教育が実現するまでの敬意、キャリア教育を実践しようとする教師たちの動機などを考察する。そこから、盲学校生徒に対する独得の認識が当該のキャリア教育実践の前提にあることや、一般的なキャリア教育とは異なる独自の意味づけがなされていたことを報告する。

そして、最後に全体を振り返ることで盲学校教師の実践が盲学校制度をどのように支え存続させているのかについて考察する。

様式７

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　　名　（　　佐藤　貴宣　　）			
論文審査担当者		（職）	氏　　名
	主 査	教授	山中　浩司
	副 査	教授	斉藤　弥生
	副 査	准教授	稲場　圭信

論文審査の結果の要旨

申請者、佐藤貴宣の過程博士学位申請論文『障害児教育体制に関する社会学的探究』は、障害児教育制度の一環をなす盲学校制度の歴史社会学的分析と学校エスノグラフィを結合した意欲的研究であり、申請者自身が当事者である視覚障害者が歴史的にどのような教育環境におかれ、学校において教師によってどのようにカテゴリー化され特徴付けられるか、また、外部社会との関係において教師が自らの職業的地位をどのように合理化し正当化しようとするのか、さらにそのことが視覚障害をもつ生徒の進路にどのように影響するのかを明らかにした労作である。論文は、序章と終章を含む９つの章から構成されており、序章が問題の導入、１－２章が、先行研究のレビューによる研究の基本的方向と用いる理論的枠組みの呈示、３－４章が明治以降から現代に至る盲学校制度・盲教育制度の歴史社会学的分析、５－７章が、東北の盲学校をフィールドとして、特に教師の語りのエスノメソドロジーを用いた分析、終章が総括となっている。申請者は、まず、戦後日本における障害児教育に関して二つの基本的な立場、障害のある子供を特別支援諸学校において教育すべきとする「分離派」と、普通学校の中でほかの児童とともに教育すべきとする「統合派」の間で行われた論争を概観し、こうした論争における不毛な対立を指摘しつつも、自らの立場を基本的には「統合派」の立場に近いものと明示している。さらに、日本における新しい学校社会学の潮流の影響から生まれた障害児教育に関する学校エスノグラフの重要性を指摘し、これとイギリス障害学において隆盛を見た障害者政策をめぐる種々の社会的コンフリクトの分析を組み合わせる方向性を示す。特に、外部社会の変化が盲学校のような閉鎖的な学校組織とそこで働く教師の職業理解にどのような影響を及ぼし、また当該組織や教師集団がそれに対してどのように反応するのかという問題を焦点とし、歴史的分析とフィールドワークによる現場の分析の必要性を強調している。３－４章における歴史的分析においては、明治以降の盲学校制度の変遷を概観し、従来公教育の埒外に放置されていた盲教育が明治末期以降の盲唖教育令制定運動を背景として次第に公教育に組み込まれていく状況を明らかにした。さらに戦後の盲学校教育制度については、1979年の養護学校義務制、2006年の特別支援教育体制への移行という二つの制度的転換点に焦点をあて、学校制度の当事者たちがこうした転換をどのように理解しその変化に対応しようとしたかを明らかにしている。障害児教育の対象範囲を大幅に拡大する制度変化と、それに対して伝統的な盲学校制度を合理化し正当化しようとする盲教育界の応答の関係から、申請者は障害児教育が埋め込まれている複雑な社会力学を明らかにしている。５－７章においては、申請者は東北にある盲学校をフィールドとして、1990年代にそこで働いた教師たちの語りから、この時代に顕在化した盲学校生徒の進路志望の多様化、それに対して一定の理解を示す普通科教師と伝統的な三療業への進路を勧める理療科教師の間の対立関係を詳細に描き出している。また、制度的な転換が生じた2000年代中庸における盲学校の状況について、現場教師のインタビューをエスノメソドロジーで用いられる成員カテゴリー化論に依拠しながら分析し、「盲学校教師」のなすべき行動として生徒の「外部志向の冷却」と「消極的（非競争的）学習指導」が道徳的に肯定される過程を明らかにし、教師におけるこうした対応が、生徒にとって、盲学校内部の職業課程への進学が「合理的」で「妥当」な進路として形成される契機となっていることを示した。さらに、外部への志向性を強める生徒に対するキャリア教育が実際には困難を極めるという現実を通じて、こうした教師の対応が、外部社会における障害者への大きな障壁の存在とも関連していることが示された。申請者の研究は、先行する海外の障害学の研究動向に十分注意を払いながら、日本において現在あらゆる障害者についての懸案となっている障害者の社会的包摂という問題に重要な知見をもたらすものと考える。申請者が用いる理論的枠組み、研究方法、分析概念について精査し、きわめて妥当なものと判断し、本論文は博士［人間科学］の学位授与にふさわしい業績と判定する。